

## 九州派 グループ紹介

桜井孝身

九州派は一九五六年の街頭展(福岡県庁西通り、画家、詩人の共同作業)から初まり、五八年には第一回の九州アンデパンダン展を主催しました。ここに五九年の第二回九州アンアパンゲン展の呼びかけの言葉を引用しますので九州派の本質を御理解いただきたいと思います。

昨年四月、私たちは九州の地に前衛美術の場を築きあげようという願いのもとに、はじめて「九州アンデパンダン展」を開催しました。これは地方に散在する前衛作家を結集したという意味において、意義深い第一歩であったと同時に、また展覧会としても「アンデパンダン」という形式の新しさによって、画期的な成功をおさめることができました。現在の日本は、あらゆるジャンルが若い力を結集し、こぞって新しい芸術を押し立てようと努力していますが、私たち地方美術家といえども、これを拱手傍観していることはゆるされがたいことでもあります。こん日の私たちは、私たちの新しい美術を、積極的な意欲をもって推し進めなければならないと思います。そういう意味で、私たちは大きな抱負と自信をもって、ここに「第二回九州アンデパンダン展」を開催致します。新鋭作家各位の参加を熱望するとともに、大方の御声援と御支持をお願い致します。なお、第一回展出品者のうち、山田文子、石橋光子(現在田部)が女性美術展で一・二位、古賀耕児が石橋美術館新人秀作展で一位を取得、長頼子は一陽会で特待をえたほか、読売アンデパンダン展では、中原佑介、瀬木慎一、徳大寺公英等の批評家によって、ベスト・スリーに選ばれ注目を集めました。『九州アンデパンダン展』は、さらに第二・第三の新人の温床として、有識者の期待のもとにあることを申添えておきます。—九州派同人一同

それから現在までの間、福岡・東京で二十回近い九州派展を開催、歴史的な「英雄たちの大集会」を一九六二年に開催致しました。その中から宮崎と小幡の記録を引用しましょう。

—小幡が繃帯に包まれて倒れている。横には三羽の白色レグホンが足を縛られて置いてあり、小さな机には、スタンドが点滅する中に、解剖器のメスが鋭く光っている。三羽とも小幡同様繃帯で巻かれて不思議と動かない。一切が沈黙である。沈黙の白いキャンパスに三羽の鶏と一人の人間が隣合わせた時、信じ難いトリと人間との姦淫が始まったのだった。意味不明の薄暗い法悦が沈黙の中にみなぎった頃、その沈黙を充分測定した解剖が開始された。沈黙の中の白いキャンパスには一滴の血さえもが禁物だ。そして必要なのは確実な死、ファーブルの昆虫記に出てくるアノ殺し屋の蜂のように優雅に、小幡は針で脳髓を刺して瞬時にオプゼと化した。純白の羽根は漆黒の濡れ羽に変身させられ、キャンパスの純白を悲しく飾って、沈黙の深さを競っている。純白が、姦淫の罪で、苦しみの黒と違ってゆく小幡の繃帯は、トリと同価の地底で沈澱し、またも、その肉のウマサを夢見るのか、小幡は頭の Teppan まで繃帯を巻いて深い眠りに陥いった。

時間表とは関係なく時間に生死のかかった宮崎の存在には相当驚かないわれわれさえ少々ビックリした。宮崎はスコップ(土を掘る道具)を持って参加した。博多の十一月の午後七時はもう真暗だった。それに雨も降っている。あとから思えば、始まった七時ごろから干潮になったのだから、だんだん砂浜は広くなって行った。室内でそれぞれの参加が始まると同時に、宮崎は独り浜に出て穴を掘り出した。背丈ぐらい掘ると潮水が湧くので次の穴掘りに移らざるを得ないのだ。その「得ない状態」が次から次へと穴を掘らせ、十二時ごろには七つの長さにして十二米ぐらいの穴を掘っていた。暗い穴底で水に浸って懸命に掘っている。波の音だけの誰もいない砂浜。掘り上げた砂は、高く側面に投げだされ瞬間鋭角をつくるが、すぐに雨にうたれて鈍い角になってしまう。果てしなく単調な作業が続く。それを見ていると穴の暗い底部から、この集会の強行軍的スケジュールの結果として、多くの同志を失った過去が湧きあがってくるのだった。-グループ結成以来、獲多の友が参加し、幾多の友が去っていった。歴史を積む程に離合の摩擦は激しく、ちょっとした食い違いの意見すらもが、思想性一を含んだ大議論と化し、渡り鳥がシベリアへ去ってゆくように、体質的に、それ等の人々は精神の異国へと逃がれていった。『馬鹿気たことをやると、画家として一生が台なしになる。まして展覧会でもない集会ごときに命がけでやるなぞ』の言葉だけを残して去る礎石の一つ、一つは、いまは空となり、その跡は悲しみの穴、あるいは絶望の空洞となって重ねられてゆく。これのみが運動の輝しい成果であるのかもしれない。そんな感傷にはかかわりなく、太古から繰り返し繰り返し訪れる波に、その空洞は僅かばかり残り、少ない仲間のみが穴の意味を知らされる博多の『コノ夜』なおも、この僅かなあと何人が、このカラッポの絶望の美しい穴を構築してゆくのだろうか。芸術運動の意味は判らぬが、絵画とは、所詮そんなムダ骨おったマイナスの穴でなければ、築くことの出来ない城なのではなかろうか。とすれば、なんと『ワビシイ』城塞であることだろう。このワビシイ穴を宮崎は深夜、現実掘っているのだ。午前一時頃になると、満潮になったのか水平線が妊婦の腹のようにふくらんで、徐々に穴を浸食し始めた。それは、なんと緩慢に見えて迅速なんだろう。潮は完全に穴を沈め、巨大な波が宮崎の全身を洗う。確かに海は母であるのだろう。だが山の上から、即ち安全な場所から、紺碧の波が緑の半島や白い砂浜をセンチメンタルに抱くときのみ、人々は海を母と呼んだのに違いない。だが、この薄ら寒い荒れに荒れる玄界灘の波に、頭から洗われて穴を掘る宮崎にとって、それは『母たり得るだろうか』。母だとすれば、まさしく性の悪い残酷な継母の様相だ。死を賭けた宮崎の行為は黒い悪魔に犯される少女みたいに受難的で、海の牙は容謝なく鋭く宮崎をさいなんだ。そういえば穴とは永遠に攻撃を受けるもの、痛めつけられる肌白い少女『抑圧された永遠の階級』なのかも知れぬ。『ヘコミ過ぎて孔となった』悲しい母性のみが背後の見透せる見者の資格を得るのだ。現実の宮崎は、海辺の砂浜に死を賭け、掘る行為によって凹の城を空洞で積み重ねてゆく。これこそが、マイナスの城と呼ぶにふさわしいメスの芸術なのかもしれない。との空洞のみが死を貧婪に喰らい、肥えた時間の城と化すことが出来るのかもしれない。宮崎は、その優しさに生まれ、優しさに喰われて死んでゆくのだろう。

以上、僅かな九州派のエピソードを紹介したわけだが、これが九州派の実体です。現在はオチ・オサムがオルガーナイザーとして東洋と西洋の接点、サンフランシスコに滞在、活発な運動をつづけています。我々はいままで経験により、お互い血の流れるような論戦と不眠不休の頑張りで作るな

ければ決して満足な結果を得られないと確信します。その為にも。この有意義なグループ対抗展的性格の展覧会には九州派一同よろこんで賛同すると同時に、これを機に各グループに一挑戦状を贈るものであります。

一、あなた(または貴グループ)は何故、九州にいて前衛作家たらんとしているのですか。

一、あなた(貴グループ)は、将来も九州にとどまるつもりですか

一、あなた(貴グループ)の絵画理論および主張を貴グループあるいは個人の資格で実績と結びつけて説明して下さい。

一、あなた(貴グループ)は九州にて前衛芸術集団が開花することを信じますか。

一、あなたはなにによって今あるいは将来生計を得ようと欲していますか

右の問の一つでもよいから会場、あるいは討論会場にてお答え下さい。

九州派は作品と行動によって示します。われわれは会場といわず、あらゆる場所ですぐには結論が出ないことも判っているが、むなしいほどに議論して、ものの本質を知りたいと願っています故、われわれを避けなして下さい。観客の皆さま、各グループの皆さまとの遠慮のない激突をやりましょう。